

『犯罪被害者支援とは何か —附属池田小事件の遺族と支援者による共同発信—』

酒井 肇、酒井智恵、池埜 聰、倉石哲也 著 ミネルヴァ書房 1,890 円（税込）

犯罪被害者のことを考える際に読んでおきたい本

会員 中根 洋一（23期）



犯罪被害者支援を考える本の嚆矢は「御直披」（板谷利加子）であろう。現在角川文庫に収録されている。また、最近の読みやすい本としては岩波ブックレット「震災トラウマと復興ストレス」（宮地尚子）があり、支援者が被害者との関係を含めどのような立ち位置にあるかを「環状島」という概念を用いて省察するヒントを与える（詳しくはみすず書房刊行本がある）。

さて、本書は2001年6月8日朝に起こった大阪池田小事件について、被害者遺族と支援者が犯罪被害をどう受け止め、どう対処したかを生の経過で語り、さらに支援者のなかの専門的な視点を照合させることで具体的な行動に結びつける点で参考になる。プロローグ、全9章（超混乱期・混乱期における支援、二次被害、生活・家族支援、意味の探求～回復・サバイバーへ等）とエピローグ、解説で構成される。

「支援の始まりは被害者と専門家との出会いではない」「被害の瞬間からまわりの関係者は支援者としての意識を持つべきである」という。

弁護士が犯罪被害支援に携わるのは多くが事件から時間を経過してからである。弁護士は法の専門家ではあるが、その前に被害者に向き合う支援者としての意識が要請される。

さらに二次被害の問題がある。二次被害とは犯罪に付随して司法関係者・マスコミ・周囲の人などから苦痛や不快な思いをさせられることである。本書は二次被害を与えることを避けるには「被害者の視点」

に重点を置き、「共感的態度」で接することが大切だと説く。支援者が「自分の専門性や実践理論の枠組みに固執する」と二次被害の可能性があるとの記述にはこころすべきであろう。

事件は学校の教室に突然入り込んだ犯人が刃物を振るって8名の児童を殺害したという悲惨なものであった。

事件から間もない時点で、学校側は被害児童の父母に対し「最善を尽しました」（副校长）、「慰靈祭を行いたい」（校長）という発言をした。父母はこの発言に違和感・不信感を感じたという。この段階で被害状況に関する説明は全くない。自分の子が学校でどんな被害にあったのか、父母が聞きたいのは当然であろう。学校側は経過の説明に先立って自己弁解的な発言をなしたのではないかと思われる。被害者の視点への配慮が足りなかったことを物語っていよう。

その後、事実確認作業がなされたが、事件経過の空白は埋まらなかった。

9月末になり、大阪府警から「被害児童のひとりは学校廊下を血痕を残しながら50m移動したことがDNA鑑定で判明した」との説明を受け、ここで初めて被害児童が「生きたい」と血を流しながら頑張ったことが判明した。この事実の判明とその意味のメッセージが父母の回復への原点になったという。

本書により、事実を知りたいという犯罪被害者（遺族）の要請に改めて共感し、理解することができるのではないだろうか。